

# 同窓会報

校誌 雲内会 866  
 高 関 区 八 校  
 附 属 高 校  
 機 関 附 属  
 大 学 附 属  
 都 立 同 窓 会  
 同 窓 会 機 関 附 属 高 校  
 新 制 同 窓 会  
 (723) 9966  
 男 義 道 茂 貞 晴  
 内 口 田  
 堀 野 岡  
 責 任 者  
 編 集 者

## 名簿作成に当って

同窓会会長 内野 滋 雄 (一期)

人間の喜びの一つに仲間の活躍がある。雑誌の中で「あいつは俺の同級生だ——」などと言えることは実に嬉しい。

何か縁があつて同じ学校で学んだ人々の情報を伝えることは同窓会の大切な仕事である。名簿や会報を定期に発行することは、他に仕事を持つ執行部にとって負担ではあるが、これらが社会生活の上で大いに役立つことを考えると、なんとしても実行しなくてはならないと思つている。同窓会員諸兄姉のご協力を切に願うものである。

## 訃報

松俊夫先生、成城大学教授、元都立大学附属高校教諭が、昨年八月二十七日、心不全の為急逝されました。享年六十才でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

同窓会名簿を開いて見ていると意外な人が同窓であつたり、同じ仕事をしていたりして楽しいものである。辞書を読む楽しみに似ている。できれば職業別の索引を付けたいとかねがね考えている。これには根強い反対もある。良い職業についている人はよいが、そうでない立場の人のことを考えろ——という意見である。人生に浮沈はつきものである。沈下した時に役立つ名簿を作ることが私の夢である。

ご遺族は、真佐子夫人、大日本印刷勤務の長男智夫氏、日本鋼管勤務の長女今日子さんで、ご自宅は……  
 〒152、東京都目黒区自由が丘一ノ一七ノ二二です。

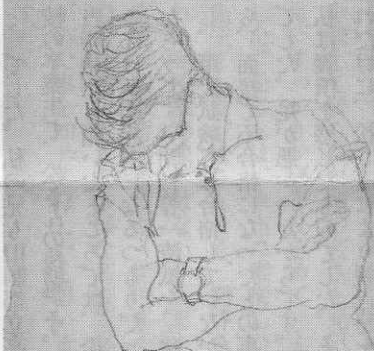
## 逝つてしまった松さん

喜多迅鷹 (元教諭)

せつがち松さんが慌しく逝つてしまった。  
「死は確実 時は不確実」といふ古い言葉がある。そのとおりだとは思ふものの、都立時代の二十一年間、大げさに言えば苦楽をともにしてきた私にとっては、しみじみと切ない。

私が松さんと出会つたとき、時代もそうだったが、生徒よりも松さん自身がシュトゥルム・ウント・ドランクの真只中にあるように眩しく見えた。都立という居心地のいい水を得て飛び跳ねている魚であつた。旧制都立の出身ということもあつて、まるで「自由と自治」が背広を着たやうで、爽やかな都会的な弁舌で教壇から世界史の発展法則を説き、近代市民社会の理想的人間像を描き出し、そして生徒の反応に文字どおり笑つたり泣

いたりしていた。私もそういう松さんの姿に惹かれて、「自由と自治」の片棒をかついた。毎年毎年百五十人ほど——それもやがて突如としてふえるのだが——の人々を送り出してはまた迎え入れ、十月下旬の記念祭最終日ともなると赤々と燃え上がるファイヤーの周りで、永遠に消えることのない都立の伝統に酔い、松さんの叩く太鼓で古いロマンチックな歌を歌つた。



そんな時代がいつ過ぎ去つたのか、私にはしかとはわからない。が、二十年ほど経つた三月のある寒い夜、教師が宿直を余儀なくされた事件で、私は松さんと一緒に会議室の硬いテーブルを四つ並べてその上に貸しぶとんを敷き、暗い四角な天井を見上げながら一晩語り明かした。結論は、「もうぼくらは都立には無用な存在になつたんだ」ということだつた。気が

付いてみたら、どこかで分岐してしまふに遠ざかつて行く生徒たちを乗せた列車に向つて、別の線路上から「自由と自治」と声をかけて積み重ねていたやうだつた。私は、思いきり感情に感傷して過ぎた日々を告げるやうに、松さんを置きざりにして都立を去つた。……だがそうなたあとでも、何かといえは私は松さんを訪ね、松さんも何かにつけては電話をかけてきた。毎年一月一日には、私はきまつて松さん宅へ出かけた。そして今年……私はしようことなく、谷中の松さんの墓に詣つた。まだどこかに江戸の面影も偲ばれる一帯を歩き、明治十年創業という花屋で花を求め、今はただの石になつてしまつた松さんの墓前に手向けながら、生まれて初めて新年早々こんなことをして、ああ、こんなことをしたぞと早速電話して告げる相手といえは、それはやはり松さんしかないいな、とふつと錯乱したやうな心理状態に落ち込んだ。

あのドイツ・ロマン派を自認していた松さんは、醒めかけた苦惱をいつかちらと私に洩らしたまま、さつさと遠くへ旅立つてしまつていた。今度は私を置きざりにして……

●昭和61年度版『同窓会名簿』の本調査を実施いたします。同封のアンケート葉書に、ご記入の上、4月30日までに返送下さい。名簿の発行は8月下旬。定価は送料とも2,000円の予定です。氏名索引、クラブ・サークル別名簿、校歌、寮歌、記念歌集付。

カットは故松先生「沼津へ向う車中にて——昭和30年ごろ——」喜多迅鷹 画

十月二十二日、日曜日。西独出張から帰って二日目の夜。夕食も終り、テレビを見ている所へ、堀内君から電話。「年が明けてから同窓会報を出すので、松先生の追悼文を…。斉先生に相談したら、吉田さんがいいとの事なので…。」と頼まれ、初めて松さんが亡くなつた事を知る。八月下旬に急逝され、同期の仲間に連絡を取る暇もない程だったとの事。や、しばらくは茫然とする。電話を切る入りながら昔の事を思い出す。又々涙と悲しみがこみあげて来る。

こんな経験は、母親を亡くした時以来の事。全てに嫌気がさし、精神的に大きく動揺していた高校時代に、相談相手になつてくれ、親身になつて心配してくれ、松さん。助言をしてくれ、励ましてくれた浪人時代。転職の時も、賛成してくれ、保証人になつてくれた松さん。人一倍世話になつた松さん。今まで松さんの死を知らなかった事、そして、時々訪ねて居ればよかったのにと、悔やまれる。

△  
松さん、私は、松先生と呼んだ事ありません。先生と云うよりは、私達生徒と同じ意識で接触してくれ、いわば仲間的存在でした。又、仲間であると同時に、良

き先輩であり、話し相手でした。松さんが教壇に立った時、その勢いには、すぎましいものがありました。目をカッと見開き、口を更に大きく開け、時々手を大きく振り上げ、鼻をクスクスと云わせながら、腹の底から声を張り上げ、口角泡を飛ばし、頭が大きく上下に波打ち、黒板に大きな字をなぐり書きしました。あんな小さな体で、足が不自由なのに、よくもまああんなに激しく動きまわり、大きな声が出たものと感心します。松さんは、大学出たての意気に燃

松さんは、昭和二十二年三月、旧制都立高等学校文科乙類卒業です。すから、文字通り私達の先輩です。そして、昭和二十五年三月、東京大学文学部西洋史学科を卒業し、都立大学附属高等学校の社会科教師として、四月に来られました。その前年には、所謂、学制改革が実施され、母校が消滅し、何等実質的関係のない都立大学附属高等学校に編入され、不満と精神的動揺のかくせなかつた私達にとつて、大きな味方として迎えられ、拠所となつて事は間違いありません。

事も、極力避けていました。手をかしてもらつた時の、あテレ臭をうな顔も忘れられません。何んでも私達と一緒にやるうとしました。努力家でもありました。校庭に出て、ソフトボールと一緒にやり、バットを振つて一塁にも走りました。記念祭歌や寮歌が好きで、よく歌いました。一番好きだったのは、第十六回記念祭歌。闇の夜に…：「でした。私の兄も旧制都立高校の卒業生で、松さんの後輩です。当時兄から聞いたところでは、松さんは新聞記者になるつもりだったそうです。朝日等一流紙を受験し、筆記試験では合格していましたが、面接で不合格になつたとの事でした。足が悪かつたからです。私は義憤を感じたものでした。それだけに、松さんにより親近感を覚えました。私が附属高校を卒業するまでの二年間、松さんは私のいたC組の担任でした。それは私にとつて、非常に幸運であつただけでなく、その後の将来にとつて重要であつた事が、後になつて解りました。種々悩みの多かつた私を家によく呼んでくれ、悩みを聞き、助言をし、励ましてくれました。結果的には、人間は何の為に生きていくのかを考えさせられ、解らせてくれました。今日私があるのは、松さんの御陰と云つても過言ではありません。二年間に色々な事がありました。その中でも思い出すのは、三年の時の事です。記念祭の執行委員長をした時の「グジラ墜死事件」と卒業式。グジラ事件の時、松さんは「ロクチャンを警察に渡すな」と私達に強く訴えたものです。ロクチャンとは、当時の小笠原録雄校長で、旧制時代から水泳部の部長でもあり、皆んなから慕われていた先生でした。私達には勿論論はなかつたのですが、松さんに共鳴し、私達なりに努力したものでした。卒業式では、私は卒業生を代表して、答辞を読みました。通常、答辞を読むのは、成績優秀な生徒ですが、松さんは、職員会議で猛反対をし、成績ではなく人間で選ぶべきと強く主張、お、かたの先生方の反対を押し切つてしまいました。答辞の内容は、私自身に作らせてくれました。社会科の先生方の部屋で、慣れない手つきで筆を持ち、答辞を書いた事を思い出します。松さんはあの頃、本当に胸を張つて堂々としていました。

# 松さん

吉田泰二(2期)

える、熱血漢でした。教科書に出ていない事も教えてくれたものです。世界史が専門なのに、私が思い出す授業は不思議に江戸時代末期の日本史です。もつとも黒船がからんでいますから、やはり世界史かも知れません。その時教えてもらった江戸町人氣質の、狂句、川柳は今も覚えています。「大平のねむりを醒ます 上き煎たつた四杯で 夜もねむれず」、  
「武器具具師 アメリカ様と そつと云い」。あの時の、得意気な松さんの顔が思い出されます。

私達が、松さんのひどいビッコに驚いた事も事実です。しかし、それを少しも他人に意識させない、熱血あふれる人間松さんの魅力にひかれ、私達はいつの間にか、密着した仲間意識を持つようになつていました。私達は、松さんをおたかも錦の御旗のように押し立てて、嫌な教師連中を押ししのけ、学校・大学に相対している様な感を持つていました。松さんは、肉体的な事で他人に同情されるのが、極端に嫌いな人でした。又、テレ屋でしたから、手をかしてもら

昭和四十年代になつて学校内が荒れた頃、松さんには以前の様な元気がなく、「俺、教師なんて止めたくなつたよ」と云われました。

△

# 松岡先生と

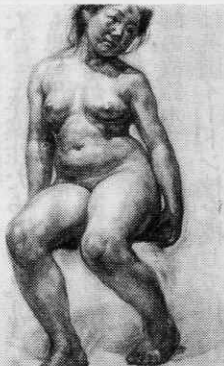
## 「近代奈良異色画家展」によせて加藤 武利(1期)

「近代奈良の異色画家展」に出展する、故松岡先生の作品を整理しているとき、段ボールの片隅から、未発表の人体デッサン三十七枚を発見した。

このデッサンは、帝国美術学校(現芸大) 師範科に在学中に二科展に出展、すでに二科賞を受賞していたが、それにあきたらず、卒業後再び彫刻科に入学、夜間は本郷絵画研究所に通い研鑽を重ねられていた、大正十年頃の作品である。

私には、先生が亡くなられるまで三数十年間、公私にわたって教えを受けながら、一度も眼にふれなかつたものだけに、またその素晴らしさに、強い感動を覚えた。

人体デッサンは、男女の裸像で、当時モデルは専門的職業でなかつただけに、描かれている市中の人の、なまなましい生活のにおいさえ感じさせ、習作というより作品



としての価値がある。

私も、美術を志さずものは、人体デッサンの教材として、安井曾太郎、黒田清輝の帯欧作の複製がある。彼等のものは、対象を描写するのに、光の明暗に頼るもので、平面的で、情緒的で、安っぽいものだが、先生のデッサンは、鋭い描写が人体の内部まで及び、正確なモデリング(面と面のつながり、面は部分の方向)は流動感にあふれ、重厚な質量は、見るものの水晶体に、彫刻に触れるように圧倒する。

これだけの力量を持ちながら、東洋の漆に魅せられて、全生涯の情熱を、漆絵の開発に賭けられたことが悔やまれてならない。しかし今度の催しが、隠れた力のある美術家の発掘にあることから、美術館は、先生の業績を十分に評価し、同時に展覧する五人の画家達

の作品が、平均二十点なのに、先生の作品は六十六点を展示、うちデッサンに十八点の壁面を提供してくれた。

私は、この機会に、このデッサンを複製し、美術を志向する学生や美術愛好家に、ひとりでも多く見てもらおうことが、私に全作品を委託された先生の遺言に応える義務ではないかと考えている。近く、松岡夫人から、資金的援助を受けて、デッサンのなかから十点を選び、描かれた頃の色調に再現複製して、三月中に、五百部を作成する予定である。松岡夫人の強い要望で、一部を全国的美術研究所や学校、美術館に寄贈し、また都立の諸兄弟のなかで毒妻があれば、実費でお渡ししよう指示されている。開期中に、関西に旅行される方は、「異色画家展」に是非ともお立ち寄りいただきたい。

### 近代奈良の異色画家展

松岡正雄、山下繁雄、浜田葆光、普門、咲、花野五嬢、六條 篤

会期 3月1日(土)〜30日(日)  
月曜休館

時間 午前9時〜午後4時30分

会場 奈良県立美術館

(近鉄奈良駅下車5分)  
奈良県庁裏

入場料 2000円  
☎0742(23)3968

「そんな事云わないで頑張らなきや」と云いますと、「君達の頃は良かったな、歯ごたえがあったよ。もうあんな時代は来ないだろうな」と、力なく笑ったのを覚えています。その後、昭和四十九年四月、成城大学文芸部助教授として移られた事を知り、「あ、やつぱり都立に愛想がつきたんだな」と思っても、同期会で御会いた時も、「車に乗るのもおっくうになったよ」とか、「歯まで弱ってな」等云われ、私達を教えて居られた頃の若さと元気をすっかりかけをひそめていました。松さんは、本当に素晴らしい先生でした。松さんこそ、期待される高校教師像ではないかと思えます。臨教審の委員や、世の多くの人達に、松さんの様な高校教師がいた事を知ってほしいと思えます。

松さんはその後、学界が京都で行われると京都を訪れる様になり、京都が大変好きになられ、「世界史より日本史の方が面白いな」と、本史をやれば良かったな」と、奥様に云われた事があるそうです。亡くなられた十日程前、風邪気味で体調はあまり良くなかつたそうですが、こんなチャンスもそうないし、車で家まで迎えに来てくれ

るから歩かなくても済むしと、出版社の方々と京都の大文字焼を見に行かれました。昭和六十二年度から高校で使用される世界史の教科書も、校正がほとんど終わっていただけです。ですから、松さんの名前の印刷された教科書が、これから数年間使用される事になっています。

昭和六十年八月十六日、京都で大文字焼を見、帰りに箱根に寄つて十七日帰京。風邪気味の為か、息苦しく、二階に上るのもおっくうだったとの事。足の方ばかり気を配っていたとの事で、「卒業生に整形の医者がいないかなあ」と云われていたとか。色々な病院で診察を受けられていたそうですが、どこでも同じ様な事を云い、あまり医者を信用していなかつた松さん。八月二十四日、荏原病院で診察を受け、重症ではないが様子を

見るとの事で入院。三日後、病状急変。八月二十七日、午前四時四十分、松さん昇天。満六十才と二日。

松さん、亡くなった時、告別式に行けなかつたので、今年の命日には、松さんが大好きだった第十六回記念祭歌をうたってあげますよ。松さん、一緒にうたいましょう。松さんの大好きだった記念祭歌を。合掌。

松さん、亡くなった時、告別式に行けなかつたので、今年の命日には、松さんが大好きだった第十六回記念祭歌をうたってあげますよ。松さん、一緒にうたいましょう。松さんの大好きだった記念祭歌を。合掌。

●松岡先生のデッサン集お取扱について B3判、コロタイプ印刷、コットン紙、10枚1組、予定価3,000円。ご希望の方は同窓会宛お申し出下さい。

「僕たちの高校はいい学校だった。」と卒業生たちはいう。誰でも思い出し美しいのだが、そんな感傷からではない。旧制高校から引継いで教頭になられた英語教師の故鈴木三之助先生は、「本校は英国イートン校を模して作られた学校です。」と口癖のように云っておられた。英国で一、二の名門校である。

いい学校とだけ云われても中味はわからない。後にのこるような誇るべき学校なら、どんな事がよかつたか、何は間違つたかと書き残して後輩に伝えるべきではないだろうか。昔よかつたにしても、伝統として今に伝わらないのは、学校紛争によって教育活動が途切れてしまったからである。従つて、これから述べようとする昔の学生、生徒とは昭和20年頃までの事である。

△ 昔の卒業生たちが、何を大切に考え、どう生きようとしたか、それを代々の生徒が受けついで伝統となり、後輩たちの生き方の基盤となるのである。伝統とは昔のよるに古いものではない。それを創りはじめた先輩たちが真剣であればあるだけ、又それをうけとめる後輩の精神が新鮮でエネルギーにユてあればあるだけ、同じ理想の

道を燦然と輝き照らすものである。

△ 最近、テレビや新聞雑誌のどれを見ても、小中学校生の「いじめ」や「体罰」や「自殺」の問題がとり上げられて、見る者の心を暗くする。一般都立高校でも、生徒たちの授業中のお喋りやはげしく授業にならない、と教師たちが嘆く。本校でも例外ではない。競争には負けても、あんなにいさきいと学ぶ事を喜びとした生徒に、教育は生涯かけてやり甲斐のある仕事だと打込んだ私も、退職する

## 続・都立よ永遠なれ

斎 正 子

頃には、情熱をかけて打込むには淋しすぎる、と思うようになっていた。

戦後40年という短い時間の間に、人々の価値観や思いやりの心が、こもも変つてしまふものなのか。大衆の心をかえるに必要な歴史的時間の短かさに驚くとともに、ならば昔の生徒たちが情熱を傾けて作り上げた伝統を、後輩たちに、見慣れぬものとして踏み捨てられてしまわぬ中に、その輝きの消えぬ中に、前にもまして輝きかえすために、伝統を問題提起せねばな

らぬと思うようになった。

△ 去る1月30日「日本経済新聞の交遊抄に先生のこと載っていますよ」と卒業生等多くの人から電話があつた。旧制の終りの頃の卒業生広井欽哉氏が、高校生の生き甲斐としての人生観を言っている。読んで改めて感動した。荒廃した当時が眼に浮かぶ。不敗を信じた日本の敗戦は、大人たちの身も心も崩壊させた。大衆の進むべき方向を声高く指示する人もない中であつて、しかし少年たちは各自友

情の手綱を強く手繰りあつて結びあひ、恥をもつて道義を守りぬいた。その精神に、武士道を見たのである。恥じるべき事に真剣に恥じる心に高貴の精神が宿る。以下広井氏の文をのせる。生徒の人たちはよくよんで伝統の主要な部分として身につけてほしい。

『多感な時代の紅一点』  
(日本経済新聞「交遊抄」より)

我々一生の間に、魅力ある人と出会いが最高の喜びであり、それが継続出来ると最大の資産とな

る。サラリーマンにとつては特にその感が強い。私は多数の人に出会い、また多数の人々の世話になつてきているが、その中で終戦前後にさかのぼると、中学、高校時代の友人ということになる。

私が通つた都立高校は旧制高校七年制で中学高校が続いていたが、入学当時既に戦争真つただ中であり、高校へかけての青春は、戦災、疎開、終戦、学制改革というように混乱、激動の時代であつたが、「友情」というものが最大の生き甲斐(がい)で、一貫してその混乱を支えていた。「エゴ」と「イジーゴーイング」が友人の間では最大の恥だつた。

当時の同級生では、吉永小百合さんのご主人であるフジテレビの岡田太郎君、彼と並んで文学通の岡崎君(サウジ大使)、音感抜群で自らバイオリンを奏する玉置君(日本航空ロンドン支店長)、ち密な頭脳の相澤君(商工中金理事)、温厚な人柄で我々をひきつける星野君(三井銀行取締役)、快活なスポーツマン中沢君(海外経済協力基金理事)等、よく語り、よく遊び、切磋琢磨(せつさたくま)して、生きるのに精いっぱいだった終戦前後の青春を過ごした。四十年以上の交際だが在京組だけでも年に一度ぐらいは会いたい、

佐藤信二君(衆議院議員)、三門君(鴻池組東京本店副社長)も加わつて会食するのだが、最近皆の日程がなかなか一致せず、昨年末の計画が流れ、新年に持ち越した。

△ このような中学から高校への多感な、また混乱の世の殺風景な学園に、花を添える紅一点があつた。当時旧制高校の助教授では珍しい女性の生物担当の先生で、新進気鋭の教育者として情熱をかけて我々に接せられた。ただ単に生物の先生というだけでなく、戦災に遭つたり病氣になつたりした学生を励まし、数学が苦手の落ちこぼれ生徒を集め放課後わざわざ講習を行つたり、生徒にとつて何とも頼りがいがある相談相手となつていた。

その先生が昨年退官されると聞いて数百人が集合して謝恩パーティーが開かれた。遠隔地から駆けつける人もいた。浜松で医療に献身サービスしている伊藤邦幸君もその一人だ。我々の若き日の青春の思い出には必ず出て来る先生である。退官後も生物の生きたままの教材を学生に提供する機関を作れないかと東奔西走されているが、昨今教育の問題が論ぜられているだけに、このように生きた教育をする先生にめぐり合ったという事

が、

●は幸福だったと思う。今なお、教育に情熱を傾注されている先生の名は斉正子先生である。

(第一生命保険常務)

数学のテストで殆んど全員が30点をとった時一人だけ70点がいた。それが広井君であった。かつて、同紙面で、複雑な要因を含む日本経済を分析し動向を見通す彼の一文を読んだ。彼の文に登場する人

### 19—A組 クラス会便り

「こんにちは。例年通り喜多氏銀座で個展を開きます。今年のテーマは……」

私たちのクラス会の連絡ハガキは、必ずこの文章が始まります。都高を退かれたクラス担任の喜多サンが、毎年五月に銀座・明治画廊で開く「きた・としたかスケッチ展」を鑑賞しに集まるのが、私たち(19—A)のクラス会なのです。(個展をヒヤカシ、それを着に銀座で一杯などを目的の、恩師に弓引く不貞の輩は我がクラスには居ない、とは思いますが……)

スケッチの素材になった東・西欧の有り様、喜多氏のあの香り高き話術とともに楽しんでいるのは夕刻まで、二次会・三次会と杯を重ねる内、十数年をタイムスリップ、最後は深夜の銀座でバカ騒ぎ、一年後の再会・再々会を約す握手も泥酔の中……何の事はない、みんな不貞の輩です。

たち——当時坊主頭だった——が日本の将来を決定するような場にいるのを見て、私はなにか安心してきるような感じがしているのである。

追記 昨年十二月に交通事故で入院し、年頭の御挨拶を欠礼しました。お許し下さい。CTスキヤンも異常なく、すっかり元気になりました。

すっかり喜多氏の個展にオンブの形ですが、かく言う小生も大学での学生歌舞伎公演、ちやつかりクラス会総見にした前科あり。クラス会の連絡役もその罪の報い、乗りかかった何とやら、一生努めさせていただきます。

お子さんの手も離れ、やつとテニスのラケットを振れますと、うれしそうに旧姓塚田さん。子供がこんな面白いものとは思いませんでした、という年賀状を呉れた深田君。税理士試験に受かった事を報告する荒木君の誇らしげな顔も印象的です。「ロンドンに行く、皆によろしく」とだけ書いた葉書

いかにも好漢尾尻君。ご主人・お子さんとカリフォルニア在住の旧姓河野さんはお元気でしょうか。——以上はこの一年のニュースを思いつくまま。

師の個展は、51人様々の「ちょっといい話」に出会える場でもあります。(原 一平)